

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム  
第3回 外部評価委員会の概要

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラムでは、第三者の視点からプログラムの運営についての評価を行い、その意見をプログラムの改善に反映させることを目的として、外部評価委員会を設置いたしました。ここに掲載するのは、平成27年1月22日開催の第3回外部評価委員会における評価・意見の概要です。

外部評価委員会の場で得られた評価・意見を、グローバルに活躍できる人材育成を目指す本プログラムの発展と進化に役立てていきたいと思っております。

なお、外部評価委員は以下の通りです。

(文責：超域プログラム自己点検・外部連携ワーキング)

**外部評価委員** [五十音順、敬称略、役職名は、委員会開催当時のもの]

上野山 雄	パナソニック株式会社 フェロー
岸本 喜久雄	東京工業大学 大学院理工学研究科工学系長 教授
齊藤 紀彦	株式会社きんでん 代表取締役会長
大坊 郁夫	東京未来大学 学長
中野 健二郎	京阪神ビルディング株式会社 代表取締役社長
広渡 清吾	専修大学 教授

## 講評の概要

項目	内容
プログラムの進捗状況	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 取り組みが全般的に順調に進んでいると評価できる。</li> <li>・ 年々プログラムはよく練られてきており、非常に精度の高いものになってきている。</li> <li>・ 教育プログラムとして、「孵化期」から「成長期」に入ったと言え、これから先、どのように教育プログラムが成長し、充実されていくのかに期待が持てる。</li> <li>・ 1期生から3期生までが揃い3年間の実績を踏まえての評価となったが、履修生達との懇談では1期生が全体を引っ張る形での、皆のたくましい成長を実感することができた。</li> <li>・ 履修生の中でも、特に博士後期課程1年となった1期生は、この3年間の経過を見ていて、明らかに成長している。</li> <li>・ 当初は、教員も履修生達も試行錯誤でプログラムに挑戦してきたが、いろいろな工夫により不安からある意味での確信に変化している印象が感じられ、たいへん良い形で進み始めていると思われる。履修生との懇談においても、特に1期生の成長が言葉の端々に感じられた。</li> </ul> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p><b>【今後に向けての要望】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本プログラムの取り組むべき項目として、システム整備が素晴らしいだけに、PDCAがどれだけ充実しているか、若干の疑問が残る。本プログラムのポイントは汎用力にも重点を置いているところであり、それを評価することは一般には簡単なことではない。単に学修モニタリングシステムを導入して済む問題ではなく、日々改善に取り組むべき内容である。</li> <li>・ 汎用力の評価には人間性の評価を含むところがあり、その点が難しい。この種の評価は、実は評価する側も評価されていることが多い。本プログラムでも、PDCAもカリキュラムの見直しだけでなく、教員の考え方も含めた履修生と教員が一体となったPDCAを回されようとしているものと思われる。超域イノベーション博士課程プログラムだけでなく、将来の大阪大学発の新教育プログラムになるよう、努めてほしい。</li> </ul>

育成されるべき人材像	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後のリーダーには、強い専門知識を基盤に他分野にも肌感覚を持つことが求められる。つまり、知識のダイバーシティと言っても良い。このプログラムの履修生は、「これで良いのか」という不安を持ちながらも、挑戦している。何事も新しいことは、飽くなき挑戦から生まれる。ここから育つ人材に大いに期待したいし、期待できる。</li> <li>・履修生も後2年余で1期生が修了する。学究に残る人には研鑽を積んで新しい変化に富む研究生活を期待したい。</li> </ul>
	<p><b>【今後に向けての要望】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本プログラムで目指す人材像とその育成法はまだ十分には固まっていないように思われる。どのような姿のリーダー像を描き、育てていくのかをさらに明確にし、現在、博士後期課程の1年生である1期生があと2年間の学修でどのような力をさらに伸ばすのかを検討することが求められる。</li> <li>・プログラムがいかなる人材、どのようなグローバルリーダーを目指すか、という出口戦略に関して、知識基盤社会のインプリケーションをもっと広げ、いわば「市民社会における知的実践的リーダー」というイメージについて、プログラムの中でもっと語ることができないか。産業界・ビジネスの世界のリーダー像がよくとりあげられるが、これと並んで、いわゆる非営利的な公共的な活動の場はグローバル・レベルにおいてますます重要になっている。その可能性とそこにおけるリーダー像について、これまでより多くの情報と体験が履修生に伝えられればと考える。</li> <li>・本プログラムの目指すグローバルリーダーの定義について、グローバルの部分の取り組みはよく分かるが、リーダーの方はどうか。組織の目標を達成するには、時には論理的に説明できないこともある。それでも「このリーダーのために自分がすべき」と思わせる魅力や責任感などの人間性はとても重要である。履修生自身にリーダーについて十分議論させた上で、課題解決などのプロジェクトに参加させてはどうか。</li> </ul>

<p>カリキュラム全体</p>	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムが3年目に入り、博士後期課程へ進学した履修生達の成長が見られ、教育内容も導入型の教育から発展型の教育までが揃ってきている。</li> <li>・教育目標の重要なポイントである統合力の強化を狙いとした1年間の教育プログラムを実施し、履修生の成長につなげた点は評価できる。</li> <li>・1期生を対象とした「超域イノベーション総合」では、いわば即席チームでの協働の難しさの中でも役割を分担し、結論をまとめ上げる経験を通してリーダーシップに関する貴重な経験を積んだと思われる。</li> <li>・若年次の者は1期生の活動に対するパッションに良い意味での強い刺激を受けているとのことで、年次を追うごとのプログラムとしての成長を心強く感じた。</li> <li>・最終的には、プログラムの構成と履修生の継続した強い興味がこのプログラムの成否を決める。さらなる履修生との対話を通じ、「何をしたいか」「それはこのプログラムに有効か」という視点から、どんどんプログラムを変更して行ってほしい。教員と履修生が一丸となった手探りが新しい道に繋がる。是非、期待したい。</li> <li>・新たに導入された科目「超域イノベーション総合」は、本プログラムの目的により適合的な取組みである。文理混成チームによる「イノベーション・チャレンジ」の具体的活動は、参加者にプログラムの目指す汎用力を試し、さらに形成し、俯瞰力・独創力を培う場を与えるものとして期待できる。このプログラムの実施において、チームによる具体的成果がどのように達成されたかという総括とともに、参加者それぞれがこのプログラムの中での自分の寄与や失敗、変化などについて自己記述をし、これに基づき教員と参加者とのコミュニケーションを行うことなど、今後の取組みとして期待したい。</li> <li>・フューチャーリーダーズ・フォーラムは、履修生の将来の仕事のイメージ創りだけでなく、現在行われている座学での教育内容と実践との比較ができ、自ら気づきの良い機会となっていると思われる。</li> </ul>
-----------------	---

履修生の 選考と評 価	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの希望者の中からバランスよく履修生を選抜し、また、QEなどを通して進級の適切な管理とフォローを行っている。</li> <li>・履修生との懇談において、1期生と2期生の発言にニュアンスの差異を認めた。1期生がプログラムの追求する目的、このプログラムで学ぶ使命感を強く意識しているのに対して、2期生は自分たちにそれほどのものがないと感じている。これは、1期生がプログラムのコンセプトと使命を教員と共有し、強く動機付けが行われていることを示唆する。それに相応して、1期生はプログラムのあり方や教員のやり方についての批判も2期生より大きい。1期生と2期生のこの差異はプログラムへの履修生のインテグレーションが年次的に明確に進んでいる証左であると理解できる。このもとで、2期生は、より自覚した1期生のあり方を学びながら、プログラムへの参加を強めていくことが期待される。</li> </ul>
	<p><b>【今後に向けての要望】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1期生の進級履歴では何人かの履修中断者や最終離脱者が出ている。これらの履修生に対するフォローアップとともに、履修者の選抜方法やPre-QE、QEの内容に反映すべき事項の抽出と実行が本プログラムの向上には欠かせないものと思われる。</li> </ul>

<p>取り組 みの全学的 な展開</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本プログラムで育成する学生数は毎年20人程度で限られている。より多くの博士課程の学生の育成に、ここで培ってきている教育方法をどのように展開していくのかは課題であろう。その際、本プログラムのどのエッセンスを取り出すと効果的なのかについて検討を進めてもらいたい。</li> <li>・スーパーグローバル大学創成支援事業が本年度からスタートし、その中で大阪大学は「世界の適塾」を目指すことを標榜している。全学の取り組みと本プログラムが良い形で連携されることが望まれる。</li> <li>・個別プログラムの内容もさることながら、担当指導陣による熱心な取り組み、特にPDCAのプロセスは全学で共有する価値があるものと判断する。世界適塾構想の基盤としても是非、全学への水平展開に努めていただきたい。</li> <li>・履修生の指導教員から「大学院生が自身の専門性の社会における位置付けを俯瞰的に捉えるようになった」という意見が寄せられている。また、プログラムコーディネーターの各研究科長との個別面談から、これまでもっばら研究者養成を念頭に置いていた専攻においても、「社会で活躍する博士」への理解が深まっていること、つまり、博士人材が研究の世界だけでなく、広く社会的に活動するという理解が浸透していることが確認されている。これらは、本プログラムのコンセプトが大学内において具体的な影響と成果を獲得しつつあることの証左であり、心強く思った。</li> <li>・履修生諸君には、大阪大学全体の大学院生に対しても良い影響をもたらしてほしい。プログラムでの経験を広く生かしていくことの重要性にも目を向けさせるようにしていただきたい。</li> </ul>
<p>将来にお けるプロ グラムの 継続</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スーパーグローバル大学創成支援事業が本年度からスタートし、その中で大阪大学は「世界の適塾」を目指すことを標榜している。全学の取り組みと本プログラムが良い形で連携されることが望まれる。</li> <li>・補助金切れの問題については、何度も指摘してきたが、前進には「学生のため」にも大学連合での強い働きかけが必要である。</li> </ul>

<p>社会への 発信・社会 との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバルな視点からみて、何が教育内容としての競争力になるのかを明確にして、世界に向けてアピールしていくことが求められる。大阪大学に来ると、博士課程でこのような優れた教育が受けられるのだ、ということを広く外に向けて発信することを目指していただきたい。</li> <li>・本年度は、オールラウンド型7大学シンポジウム2014が大阪大学の主催で大阪にて開かれた。発展途上とも言えるこのプログラムのさらなる充実にとって、他大学との情報共有、意見交換等の連携強化は有効かつ必須である。次年度以降の活動の充実、活性化に期待したい。</li> <li>・最終的にはこのプログラムがひとつのシステムとして、たとえば企業、他大学からの投資や寄付の対象ともなれば理想的である。</li> <li>・世界適塾構想の中核として、経済界との連携強化に加えて、マスコミ界も巻き込んだアウトリーチ活動の強化、充実を望みたい。</li> <li>・実業界で就職するには、このプログラムの「企業の理解度」が是非必要になる。これからの2年間は、実業界に説明、理解してもらう努力が必須となる。「発信力」が必要であり、メディア等への働きかけには協力したい。1期生の実業界での実績が「継続」を約束してくれる。</li> </ul>
--------------------------------	--